近江平野野洲川下流域条里地割における用水系統と集落居住域形成

－近江平野野洲川下流域における条里地割と平地集落の空間形成に関する研究 その1－

THE LAND ALLOTMENT OF JYORI-GRID SYSTEM AND THE FLOW OF WATER FOR IRRIGATION, THE FORMATION OF THE VILLAGE'S RESIDENTIAL AREA

－ Study on the land allotment of Jyori-grid system and the area formation of typical plain village on the lower reaches of Yasu river in Oumi plain Part 1－

秦 憲志*, 桜井康宏**

Kazuyuki HATA and Yasuhiro SAKURAI

The purpose of this study is to clarify how the villages in the plain field on the lower reaches of Yasu River, Shiga Prefecture, had formed. Especially, the role of the land allotment based on the Jyori-grid system and its influence on the formation of village's residential area are focused. In this paper, the flow of water for irrigation at different spatial level is analyzed. As the result, the mechanism to use water for irrigation effectively and the land use at the residential area are clarified, and the technique of the area formation of the residential area is presented as a spatial model.

Keywords: *Oumi plain, Village, Area formation, Land allotment of Jyori-grid system, Water for irrigation, Land use*

近江平野, 集落, 空間形成, 条里地割, 用水, 土地利用

1. はじめに

人々の多年にわたる土地への働きかけが、今日のまちや集落の姿を形づくっている。一見、自然発生的にできているように思える農村集落においても、自然地形をうまく利用し、生産環境を内包しつつ、一定の地域の中にまとまって人々が居住するためには、どこかの時点で、何らかの計画的意志が働き、生活空間の骨格が形成され、時間を積み重ね、今に至っているとみるべきであろう。近江平野のような条里地割が広く分布^{注1)}、家屋が密集し塊状に存在する集落景観を見ると、地域の空間構造の骨格となっており、今日まで引き継がれている条里地割の計画的意味の大きさを思わずにはおれない。

古代の土地制度である条里地割について、いつ頃施行されたものか、「条里」ないしは「条里制」という用語が正史に記録がないため、その起源が明らかになっていない^{注2)}。しかし、近年の歴史地理学の研究によって、8世紀中頃に条里呼称法が導入され、土地を統一的・規則的に表示することが可能となり、条里地割と合体化することで「条里プラン」として完成したとされている^{注3)}。

そもそも条里地割とは、耕地を6町四方の基盤目にわり、南北につらなる6町幅の耕地帯を里、東西につらなるものを条と名づけた地割を大枠とする耕地割であり、地割形態は、道、畦畔、水路、溝等で基盤目状に区画された1町歩の「坪」区画（一辺の長さは60歩＝60間で約109m、面積は3600歩で約1.2ha）を基本単位としている。「坪」は十等分されて、これが耕地の単位区画となる。その各々

の広さは1反（360歩で約12a）である。この等分の仕方には、1辺を十等分し、隣の辺に平行に畦をつくった6間×60間の長方形のもの（長地型などと呼ぶ）と、12間×30間の長方形に割ったもの（半折型）がある^{注4)}。

近江平野における条里地割の施行規模については、郡ごとに復元された分布図が平野全体について作成されている^{注5)}が、施行単位や手順はどのようなものであったのか、謎が多い^{注6)}。今日では郡単位でのまとまった分布が見られるが、当初は複数の集落周辺に限られ、後に共通した一連の区画ができたとの指摘もある^{注7)}。

条里地割内部の土地利用の状況についても、当初、条里地割が施行されても、その内部のすべてが耕地化されていたわけではなく、平安時代の終わりごろから中世にかけて、灌漑条件が整い、より安定した水田経営が可能になる^{注8)}に従って、内部の土地利用も進んでいったものと考えられている。また、この時期は、集村が成立していった時期とも重なっており、奈良・平安時代の集落形態は、現在多く見られるようなコンパクトな集村ではなく、小村あるいは分布密度の低い疎塊村であったと言われている^{注9)}。

この地域の最近の発掘調査からも、散在していた屋敷地が現在の集村の居住域に移行している様子が報告されている^{注10)}。

以上、条里地割と集落形成に関しては地理学や歴史学、さらに考古学分野から、条里区画の形態や呼称の復元、村落形成や発展プロセスの研究などは数多く行われているが、建築学・空間計画の立

* 滋賀県立大学地域づくり教育研究センター
専門調査研究員・工修

** 福井大学大学院工学研究科建築建設工学専攻 教授・工博

Research Specialist, Regional Development Education Research Center, Univ. of Shiga Pref.,
M. Eng.
Prof., Architecture and Civil Eng. Course, Graduate School of Eng., Fukui Univ., Dr. Eng.

場から、条里地割と集落の空間構造や居住域^{注11)}の形成原理を解明しようという研究はまだ充分に行われていない^{注12)}。

2. 研究の目的と方法

本研究は、近江平野の中でも条里地割が卓越し、その遺構が今日までよく残っている滋賀県野洲川下流域、旧栗太郡北東部地域（図1：葉山・物部・大宝・治田の4村）を対象として、条里地割による平地集落の空間構造とその形成原理を明らかにするものであり、その第1段階として本稿では、明治・大正期の地域空間の姿を復元し、地域空間の骨格を形成する基となっている条里地割と用水との関係を軸にして、集落と居住域の立地特性及び居住域形成の原理を考察する。第2段階として次稿では、居住域内部の集住のしくみを解明し、典型集落の空間構成の原理を考察することを予定している。

本稿は、扇状地の地域開発の経緯を踏まえ、地域レベルや集落大字レベルでの用水の流れと居住域との関係、居住域レベルにおける土地利用の状況等を分析し、平地集落の空間を形成する枠組みや方向性を検証することを目的とするものであり、以下のように、地域レベル、集落レベル、居住域レベルと段階的に用水の状況を把握し条里地割の役割を考察する。

まず地域レベルでは、条里地割に基づく集落の空間構造を把握するためには、集落の形態や居住域の位置、集落どうしのつながり等を地域全体の中で捉える必要があるため、最初に条里地割を踏襲する小字界の入った集落立地図を復元する^{注13)}。

その際、本研究では、上記のように明治・大正期の地域空間に焦点をあてているが、それは、対象地域において明治期の村絵図・地籍図等が比較的まとまって保存整理されており、近代化による大きな環境変化が起こる前の集落の姿を把握しやすいことに加えて、明治・大正期の地域空間の姿を明らかにすることは、それ以前の過去を類推する上でも大いに意味があると考えたことによる。

続いて、大正期における農業水利調査^{注14)}より地域の用水系統と水域、用水量の状況を明らかにし、条里地割と用水路との関係を考察する。その上で、各集落の成立経緯や沿革等を把握^{注15)}しながら、地域の開発プロセスと集落形成の関係を考察し、平地集落の立地特性を明らかにする。

次に集落レベルでは、典型事例として8つの集落を抽出し、集落レベルでの用水の流れと灌漑状況を明らかにする。

最後に居住域レベルでは、それら集落の明治期を中心とする絵図・地籍図・水路図等の資料を用いて、共通する空間構成上の特徴を見出し、空間構造のモデル化を試みる。なお、現地調査および資料調査の時期は1999年6月～2003年6月である。

3. 地域レベルでみた集落立地特性

図2は、復元した明治期の集落立地図である。図には凡例で示す8指標を示しているが、このうち●印は、地域の成り立ちや地域開発と関わりが深い古い由緒を伝える神社である。また、後述の集落レベル・居住域レベルの分析対象である8地区の集落位置も明示している。

地域の概要として、立地は、旧中山道と旧東海道が交わる交通の要衝にあり、その地形は、野洲川が中山間部より平野部に出る谷口を起点に形成された扇状地である。野洲川はこれより下流、琵琶湖

に向かって大きく蛇行し、広大な平野を形成するが、対象地域の北端は栗太郡と野洲郡の境界となる境川によって分けられ、河川の自然堤防上に連続して集落が立地する。扇頂部では、南際には標高222.9mの日向山が、平野部から目印となる眺望点として見通される位置にそびえている。南側のゆるやかな山地は西端の安養寺山へとつなり、山地から流れ出す谷水を水源として、葉山川が山裾から旧東海道に沿って流れ、平野部を蛇行していく。

扇状地の地形は、標高110mあたりの扇頂部から琵琶湖に向かってほぼ平行に均等な間隔で傾斜しており、旧中山道に沿う標高95m付近には湧水地が多く扇端部にあたる。これより下流、地域の西端、標高90m付近は氾濫原地域となっている^{注16)}。

このゆるやかに傾斜した地形にそって等高線とほぼ平行に条里の南北（里）方向の地割線が入っている。その方位は、真北より東に約33°傾いており、ちょうど旧中山道のラインが東西七里と八里の境界線より一町西側の地割線と一致する。これに直行する形で東西（条）方向の地割線が入り、東西一里～十里、南北一条～七条の栗太郡条里の枠組みが決定されている。この中で東西方向の地割線の基準になっていると推測されるのが、日向山山頂を通過する二条と三条の境界線より一町南側のラインである。

集落の形態と立地は、旧中山道と旧東海道に沿って連続している街路村と平地部に独立して立地する塊状村に大きく分けられ、塊状村では、それぞれが何らかの関連性を持ちながら立地している様子が読み取れる。例えば、扇状地扇端部前後、19.千代から17.小平井にかけては、一定方向^{注17)}に沿って連続して居住域が立地する特色が見られる。農業水利との関連では、野洲川の水を直接取水、あるいはその伏流水による湧水を水源としているのは、葉山村、物部村、大宝村の3村で、複数の集落が共同で用水を管理する井組が発達している（3村の水利状況については、後で論述する）。一方、野洲川水系からはずれる治田村では、ため池が発達しており、街道沿いの集落ではグリッド以外に長方形の大きな地割もみられる。

図1 対象地域位置図（明治25年・26年）

図2 明治期における小字大字界を含む集落立地復元図

図3は対象エリアにおける全39集落の明治11年の大きさ(反別)と戸数の関係を集落形態別(塊状村、街路村、複数居住域村、山裾集落)に示したものである^{注18)}。反別に比べ戸数が少ないNo.31は山裾集落で、一部に山地を持つため、反別が大きくなっている。一方、反別に比べ戸数の多いNo.24、No.4は町場の性格の強いところで他にNo.8も同様、商工の戸数割合が3割以上を占める^{注19)}。また、口印の集落は街路村である。

図3の中から、集落形態の異なる街路村(9ヶ所)と山裾集落(2ヶ所)、町場の集落(街路村に含まれないNo.4の1ヶ所)を除くと、農村的平地集落は27集落となり、その規模分布は20町歩未満が3(11.1%)、20~50町歩が14(51.9%)、50町歩以上が10(37.0%)となっている^{注20)}。

次に、地域開発や集落形成の重要な要素として神社があげられるため、神社について確認する。対象地域には、古い由緒を伝える神社は10社あるが、次章の用水系統の分析との関連から野洲川水系に関わる3村に限ると8社ある^{注21)}。まず、式内社^{注22)}の高野神社(3.高野)と国史見在社^{注23)}の勝部神社(21.勝部)がある。また、社伝により8世紀初めの勧請とされる宇和宮神社(10.蜂屋)^{注24)}と大宝神社(12.縫)^{注25)}、日の神の信仰とつながる日向山山頂にまつられていた岩上神社(1.伊勢落)^{注26)}、風神をまつたとされる

蛭子神社(17.小平井)^{注27)}がある。そして、野洲川からの灌漑用水として最も規模が大きく、かつ歴史も古い今井用水との関わりが強い辻の天満宮(4.辻)^{注28)}及び出庭神社(5.出庭)がある。辻の天満宮は井口天神社とも呼ばれ、今井用水十郷の流入部に位置し、井水の守護神として水を治める位置にある。

図3 集落の規模分布(反別と戸数)・明治11年

4. 地域レベルでみた用水状況

対象地域の中で野洲川水系の地域については、農業水利に関する大正期の統一資料が得られるため、治田村を除く葉山村、大宝村、物部村の3村について用水の状況をみていく。図4は、大正11年における用水系統及び各集落の灌漑用水の状況をまとめたものである。また、それらの水域を地図上に表わしたものが図5である。図6には、集落ごとにみた用水が充足している水田の割合を示す。

図4の横軸は水源・用水の種別を、縦軸の実線の矢印はその用水を受ける（井組を構成する）集落を示している^{注29)}。図4、5より、まず、野洲川から直接取水する用水として、上流から一ノ井、丹後井、中ノ井、今井、桂井の5用水があり、中でも一ノ井、中ノ井、今井は受益面積が大きく、複数の集落が井組を形成し用水管理を行っている。また、これらの地表水だけでなく中段以下では伏流水による湧水も合わさって多様な用水源を有する集落が見られる。湧水の利用は、「11.野尻」より下流の中ノ井流域と中山道以西の集落にみられる（ただし、上流部にも「20.浮気」がある）。

図5より、用水路の配し方と居住域、条里地割（字界）の関係をみると、一ノ井では山裾、旧東海道の街路村に沿って水をひき、地形の高いところから条里の東西（条）の方向へ水を流し、グリッドパターンの条里地割によって下流の農地全体を灌漑している。また、今井では、野洲川から条里地割に沿って直線的に水を引き、最上流の集落「4.辻」の居住域や集落出口部分で分岐させ、さらに地形に沿った流れを利用して水路を分け、東西方向の幹線となるいくつかの水路をつくりながら、条里地割と組み合わせて、地域全体に水が行き渡るよう工夫している。一ノ井と今井の間に位置する中ノ井では、地形に沿って流れる自然の河川形態を利用し、一部で、条里地割と整合させている跡がみられる。たとえば、「9.大橋」地先の水路形態のほか、井組の最上流の集落「10.蜂屋」では、神社の北側に曲

線の地割がみられ、元禄11年（1698年）の絵図では、この部分に沿って中ノ井が描かれている^{注30)}。それが明治大正期には条里地割に沿って居住域を通過する水路が中ノ井の主流になっている^{注31)}。

これらの用水と神社との関係では、いずれも最上流に位置する井組の起点となる集落には古い神社がある（一ノ井→伊勢落・岩上神社、中ノ井→蜂屋・宇和宮神社、今井→辻・天満宮）。また中山道や中ノ井川沿いの湧水の多いところに古い神社が多くみられる（勝部・勝部神社、縷・大宝神社、小平井・蛭子神社）。

次に図6より集落ごとに用水の過不足をみると、水量が足りている集落（用水系統のいずれも「適」あるいは「豊」）は、一ノ井の上流に位置する「1.伊勢落」と「6.六地藏」、7.小野、中ノ井では、末端に位置し流末の水を受けることができ、他にも複数の湧水等から水を受ける「16.霊仙寺」、今井では、「20.浮気」、「21.勝部」となっている。「20.浮気」（ふけ）は、水気を漂わす水沢の地という名前のおとより豊かな湧水がある。「21.勝部」は、郡内で最も古くに開削され規模の大きい今井組の中で800反以上の水田を有する大規模集落であり、また古い神社があることから、用水系統の中心的位置を占め、最も早くに開発整備が進んだ集落であると推察される。

また、8割以上「適」は、中山道沿いに位置する「12.縷」（94.9%）と中山道以西の「17.小平井」（94.9%）、上流部の「2.林」（88.7%）、6割以上では河川の自然堤防上に立地する「29.横江」（63.4%）があるが、その他の集落は慢性的な水不足状態にある（図中、率の記入のない集落は水田全体が用水不足の状態を示す）。

以上より、扇状地の扇端部（標高95m付近、湧水が多く分布する中山道のラインを中心とする）や扇頂部、河川の自然堤防上にあり湧水に恵まれた集落、また流末にあり複数の用水系統の水を受けることができる集落は、比較的水に恵まれ、一方、扇状地の中央部の集落は慢性的な水不足状態にあることがわかる^{注32)}。

図4 大正期における野洲川水系集落の水利系統図

図5 大正期における野洲川水系集落の水利水域図

図6 集落ごとにみた用水が充足している水田率

表1 分析対象集落と活用資料

番号	集落名	反別 (町歩)	戸数	分析に用いた絵図・地籍図、水路図等資料
9	大橋	52.37	49	大橋村地券取調総絵図(M6):(ア) 大橋村全図(M22~26年と推定):(ア)
11	野尻	35.63	42	野尻村地券取調総絵図(M6):(ア) 野尻村地籍全図(M17と推定):(ウ) 野尻村全図(M22~26年と推定):(ア) 大橋村大字野尻図(大正期と推定):(ア)
15	北中小路	37.90	35	大字北中小路地籍図(M22~26年と推定):(ア) 北中小路水路図(T11):(ア)
16	霊仙寺	43.84	50	霊仙寺村地券取調総絵図(M6):(ア) 栗太郡霊仙寺村地籍全図(M17と推定):(ア) 霊仙寺水路図(大正期と推定):(ア)
17	小平井	32.58	27	栗太郡小平井村地籍全図(M18~21と推定):(ア) 栗太郡小平井村縮図:(ア) 小平井土地台帳(M23):(エ) 大字小平井字全図(大正期と推定):(ア)
18	十里	38.98	52	大橋村大字十里全図:(ア) 吉川井筋絵図(明治期と推定):(オ)
22	阿	25.51	28	阿村地券取調総絵図(M6):(イ)
23	伊勢	37.84	35	伊勢村地券取調総絵図(M6):(イ)、(カ)

注) 資料出典: (ア)栗東歴史民俗博物館所蔵、(イ)『守山市誌地理編資料古絵図』、
(ウ)『栗東野尻の歴史』、(エ)『小平井の昔』、(オ)テーマ展「十里の歴史と文化」冊子
(栗東歴史民俗博物館)、(カ)『伊勢町民誌』

5. 典型平地集落の空間構造

集落形成において、まず考えておくべきこととして、集落全体の農地に出来るだけ水を確保できるよう、水を高度に利用する工夫と同時に居住域の定住環境を整えるために水を治める工夫がなされていると想定される。このことを、集落大字レベルでの用水の流れと居住域の位置関係及び居住域レベルにおける土地利用の状況から分析、考察する。対象とする集落は、条里地割を踏襲し平地集落の典型的なモデルとなるよう、規模と集落の形状、居住域の形態、資料の有無を考慮して、表1の8集落を選定した^{注33)}。活用した資料は表に示すとおりである。なお、以下では集落名を省いて集落番号のみで表記する。

(1) 集落レベルでみた特性

図7左欄に、8集落それぞれの集落レベルにおける用水の流れとそれを受ける居住域における水の流れ、神社の位置を示す(次頁には中山道より西側の集落を、次々頁には東側の集落を順に並べている)。ここから、以下のような特性を読みとることができる。

- ① 集落の形状は6町×6町の正方形およびそれに近いもの(No.11、18、23)と4町×9町の長方形およびその変形したもの(No.15、16、17)に大きく分類できる。その他、やや規模の大きいものとしてNo.9、小さいものとしてNo.22がある。
- ② 同規模でありながら、形が正方形と長方形の二つのタイプが生まれる理由として、長方形のタイプはすべて中山道以西にあり、東西方向の用水に加えて、野洲川の伏流水による湧水を水源とする用水が南北方向に流れるため、2方向から多様な系統の用水を確保するのに横長の長方形が合理的であるためだと考えられる。すなわち、No.15は東と北の2方向から別系統の用水で集落の2つのエリアをまかなっている2方向2系統の用水。No.16は、東と北の2方向から4種類の系統の用水が4つのエリアをそれぞれ潤している2方向4系統の用水。No.17は、集落内の湧水でほとんどをまかなう自立型で、一部東側上流集落の排水を受ける。これらに対して、正方形のNo.11、18、23、それに近いNo.9は、1方向1系統となっている(No.9は一部、他の井組の徳水を受け

る。No.11 は、集落内の湧水によって賄っているエリアと天水のエリアもあるが、外から得ている用水は1方向1系統である。

- ③ 居住域と田の位置関係では、居住域が用水系統の下流に立地するか上流に立地するかで、下流立地型（No.9、17、18、22）と上流立地型（No.11、15、16、23）に分かれる。前者は農地への利水を文字通り優先するタイプで、用水が田んぼを通過してきた後、居住域に流入する。後者においても、上流からの水を直接受ける農地と居住域を介して水を受ける農地が混合した集落配置となっている。

- ④ なお、用水が居住域に入る入口部に神社が位置するものが多い（No.9、11、16、18、22、23）。その他に、No.15 では用水が居住域をめぐる出口部分に、No.17 では居住域をめぐる用水の北側に位置する。この2集落の神社の立地場所については、No.15 は神社の南側に「堂ノ前」という小字名が、No.17 は神社の東西に「堂ノ東」、「堂ノ西」という小字名が残っており、何らかの古い由緒を伝える特別な場所である可能性が考えられる。

(2) 居住域レベルでみた特性

図7右欄に、8集落それぞれの居住域レベルにおける土地利用の状況を示す。ここから以下のような特性をよみとることができる。

- ① 主要な土地利用である宅地と田以外で、畑と藪（樹林、竹林）の配置の仕方に特徴がみられる。畑は宅地に混じって居住域内に分散しているものを除けば、全ての集落において居住域の境界部や神社周辺に集約化している。また、居住域をめぐる水路まわりに配置しているもの（No.17、23 など）は、小高い場所を確保し、水に対して村を守る意味があると考えられる。
- ② 藪についても、No.9、11、15、16、17、23 などに見られるように水路まわりを固め、治水の役割を果たすとともに、No.23 の居住域の西外延部の宅地まわりに見られるような村を守る防御的役割、さらに用途の広い竹材の利用を図るため、No.11 のように細分化した地割が見られ、複数の所有者が管理している^{注34)}。
- ③ 藪はまた畑とともに、居住域の入口部、用水の取り入れ部に位置する神社周辺に

集落名／集落レベル特性	居住域レベル特性
<p>(凡例) ○印は神社の位置 →は主要水路の流れる方向 水路図等あるものは居住域 周りの水路幅員を記入</p>	<p>土地利用図</p> <p>(凡例) 宅地 畑 藪・荒地 湧水池 水路</p> <p>(神社) 神社 寺 小字界</p>
<p>15.北中小路</p> <p>2/3の水田が東からの三枝井の用水、1/3が北から流れ込む吉川井の用水を受ける。 居住域は集落の東に寄っている。神社は、用水が居住域をめぐる出口部に位置する。</p>	<p>【畑】北東部と神社南側境界部。居住域内に分散する他、北端水路沿いまとまり。</p> <p>【藪、荒地】藪は、神社の南側他。荒地は、円光寺田の南側。</p> <p>【水路、湧水池】湧水池2ヶ所。水路は東西境界部と居住域を3分割するのが南北方向に2本。</p> <p>【道】東西道路で、居住域を北出、南出に分ける。</p>
<p>16.霊仙寺</p> <p>東から西へ流れる中ノ井の流末の用水、北からの吉川井の用水を居住域の南と西側の田が受け、北側が北中小路、東側が緒の悪水を受ける。他、一部、集落内の湧水を受ける。 神社は、用水の居住域への入口部に位置する。</p>	<p>【畑】周辺部西側・西畑と北側・北原に大きなまとまり。</p> <p>【藪、荒地】藪は神社西と居住域を囲む北と南の水路内側、他、お寺周りにも。</p> <p>【水路、湧水池】神社北に池。北と西側の水路、東から南への鍵状水路が居住域を囲む。</p> <p>【道】居住域の南側を広域的な幹線道路・志那港道が通る。</p>
<p>17.小平井</p> <p>集落東端にある湧水（荒地、神の池）からほとんどの田が水を受ける。南東端の一部が、荻原及び笠川の悪水を受ける。 居住域の位置は集落の下流側。神社は居住域をめぐる用水北側に位置する（他、集落北端、中ノ井川沿いに養神社）。</p>	<p>【畑】西側と北側の水路の内側にまとまり。東側の境界部にも。</p> <p>【藪、荒地】藪は、西浦の水路の両側。</p> <p>【水路、湧水池】居住域の北から西に3尺の水路がめぐり境界部を形成。</p> <p>【道】境界部四周。</p>
<p>18.十里(東)</p> <p>全ての田が北側から流れ込む吉川井の用水を受ける。 居住域はやや南寄りに位置する。南側に湧水池があり下流集落の水源となっている。 神社は、用水の居住域への入口部に位置する。</p>	<p>【畑】北側・北ノ口にまとまり。居住域内は個別分散。</p> <p>【藪、荒地】藪は神社のまわり。居住域内は個別分散。</p> <p>【水路、湧水池】居住域内、1町を2分割する水路が南北方向に入る。</p> <p>【道】東西の境界部他、南北の道路で居住域を東出、西出に分ける。</p>

図7 典型平地集落の空間構成（用水系統と土地利用）

集落名／集落レベル特性	居住域レベル特性	宅地、田以外の主な地目とその分布
<p>(凡例)○印は神社の位置 →は主要水路の流れる方向 水路図等あるものは居住域 周りの水路幅員を記入</p> <p>9.大橋</p> <p>一ノ井用水の流末に位置し、ほとんどの田が東から西へ流れる用水を受ける。一部、集落西端の小事の田が中ノ井用水(徳水)を受ける。 居住域は集落の下流寄りにあり、神社は、用水の居住域への入口部に位置する。</p>	<p>(凡例) 土地利用図 (神社) 神社 寺 小字界</p>	<p>【畑】 境界部は東と南側の小事にまわり。居住域内は分散。</p> <p>【藪、荒地】 藪は、神社まわりと東側小事に。居住域内は水路周りに。</p> <p>【水路、湧水池】 北から西へ、東から南へ輪郭を形成。域内は1町を2分割するのが南北に。</p> <p>【道】 境界部四周。南北に中筋が入り、居住域を東西に分ける。</p>
<p>11.野尻</p> <p>居住域の南側に広がる田は、ほとんど中ノ井用水を受ける。西側の田が集落内の湧水から水を受ける。北側は天水区域。居住域は中ノ井川の屈曲部の自然堤防を利用して形成。神社は、用水の居住域への入口部、最上流に位置する(北入口部にあった大將軍社は昭和16年頃、日吉神社境内へ移転)。</p>		<p>【畑】 神社周り。居住域内は東側ブロックにまわり。</p> <p>【藪、荒地】 藪は、境界部の東面、北面の他、池や神社まわりにある。</p> <p>【水路、湧水池】 三枝井が北側輪郭を形成。居住域内は東西の水路が一定間隔に入る。湧水池多数あり。</p> <p>【道】 東西に分ける道が中央に、東側はさらに南北に二分する道路が入る。</p>
<p>22.阿</p> <p>全ての田が東および北から流れ込む今井用水を受ける。居住域の位置は、西北端にある。神社は、用水の居住域への入口部に位置する。</p>		<p>【畑】 神社まわりと北東の居住域の入口部分。</p> <p>【藪、荒地】 藪は、居住域の中を流れる水路のまわり。</p> <p>【水路、湧水池】 水路が環濠状に入る。南半分は1町を2分割する形態。</p> <p>【道】 北、東、南の境界部。</p>
<p>23.伊勢</p> <p>全ての田は、東から流れ込む今井用水を受ける。南側水田で出水時に灌水し、湿田となるところあり。 神社は、用水の居住域への入口部に位置する(明治22年、西の入口部にあった大將軍社と南の川沿いにあった天満宮が北の日吉神社境内に移転)。</p>		<p>【畑】 北側の神社の東、南端の河川と宅地との間。</p> <p>【藪、荒地】 藪は神社まわりや居住域北東の入口部。他、宅地の西端や南側水路に接する部分。</p> <p>【水路、湧水池】 水路は北から西へ居住域を囲む。居住域内に湧水池。南端は河川通過。</p> <p>【道】 居住域の中央、東西に中筋道が入る。</p>

図7 (続き)

多く、それらが集合した場所は扇の要のような村を守る(精神的だけでなく物理的意味も含め)空間装置となっている。畑や藪が一体的に配置され村を守る役割を果たしている例として、たとえば、No.23では居住域の南側の河川と接し、たびたび出水被害があるところには、明治中期まで天満宮があり、天神さんの森が形成され、畑も多く配置され村を守っている。

- ④ 水路は居住域の輪郭、領域を設定する役割が大きく、その形態は、条里地割をそのまま踏襲しているグリッド型(No.9、15、18、23)と、地形等の自然地形の要因を加味しながら微妙に変形している湾曲型(No.11、16、17、22)に分類される。湾曲型は自然の河川に近い中ノ井に近接しているものが多い(No.11、16)。ともに共通しているのは村の周りをめぐり、環濠的な景観を呈していることである。
- 居住域内部については、いくつかに分割する水路が宅地ブロックを形づくっている(1町を2分割する水路割としてNo.9、18とNo.22南半分の水路が、3分割する水路割として、No.15が上げられる)。さらにきめ細かな水路網により、居住域内の各々の宅地が水路に面するよう計画されている(その詳細については次稿で扱う)。

水路幅員の資料が存在する集落(No.9、11、15、17、16)^{注35)}をみると、No.9では6~7尺の水路が集落の周囲をめぐっている。またNo.15では、居住域の北端を流れる用水路が6尺、東と西の側面水路が5尺、神社の北側を巡る水路が8尺となっており、グリッド型では、水路幅が約6尺(1間)と広い。一方、湾曲型では、No.11で居住域の北側をめぐる水路が3尺で、他の水路も同程度(ただし集落に沿って東から南に流れる中ノ井川は除く)であり、No.17では居住域の北側をめぐる水路が3尺で最も広く、グリッド型の半分程度となっている。集落規模や立地、土地の高低差等地形条件とも関係するため、要因は複合的ではあるが、グリッド型では農地の灌漑用水を整えるのと合わせる形で居住域の形も整えられ、水路幅が広がっているのではないかと推測される。

- ⑤ 道には3つのタイプが見られる。1つ目は、広域的な幹線道路としての道(No.16の居住域の南側を通る道、No.23の居住域内を横切る道)、2つ目は、中筋道とか呼ばれる村の主要道で村の中を大きく区切る役割を果たしている道(No.9、11、15、18、23)、3つ目は、

注 6) 文献 5) pp342

注 7) 文献 7) pp471

注 8) 文献 4) より。

注 9) 文献 2) より。

注 10) 文献 9) より。

注 11) 集落の中で家屋敷が集まっている空間エリアをさす。本稿では、「居住域」で統一しているが、トータルな生活空間を表わす「村」という表現がふさわしい場合には、限定的に「村」としている。

注 12) 条里地割が卓越した地域において、工学的、計画学的立場から集落の空間形成の解明を行っているものとして文献 10) があるが、居住域レベルまでは対象としていない。文献 10) で、山森は、圃場形態について施行当初の地割区画（手法を含めた）の復元を試み、当初は坪区画レベルの主畦畔が完成し、ともに圃場も整えられた区画があれば、耕作地は未整備のままのものもあったのではないかと、施行段階を坪区画整備、田面整備、集落整備の 3 段階に分けた条里空間形成のシナリオを提起している。

注 13) 小字・大字界や居住域のラインは、大日本帝国陸地測量部（明治 25 年側図）の地図及び栗東市域については法務局や栗東歴史民俗博物館所蔵の旧公図や地籍図を、守山市域については市史編纂室による守山市小字全図を用いベースマップを作成し、各集落の明治期の村絵図や地籍図等より確認修正し、明治期の状況を再現した。これには、草津市史掲載の「小字界線による地割復元図（天田昌榮氏による）」も参照した。

注 14) 野洲川水系の葉山村、大宝村、物部村について文献 14) による。調査時期は大正 11 年。関連図面は野洲川土地改良区所蔵。

注 15) 全集落を網羅するものとして文献 8) を用い、他、文献 12)、13)、6)、7) を参考とし、それぞれの集落の字史等も参考とした。対象地域の字史等は、『鋳物師の郷・辻の歴史』（1999）、『出庭の民俗』（1995）、『大橋区誌』（1997）、『野尻の歴史』（1988）、『民誌・継の歴史と文化』（2006）、『小平井の昔』（1998）、『伊勢町民誌』（2001）、『古高町民誌』（1999）、『あれこれ あんようじ』（1997）、『小柿の歴史』（2004）などがある。

注 16) 文献 6)、7) より。

注 17) 方向は条里の直行グリッドの対角線方向、真南より西へ約 78°（条里地割の南北方向の傾き 33° + 45°）とほぼ一致している。

注 18) 明治 11 年（1878）の各村の戸数、反別のデータ。文献 13) による。

注 19) 文献 13) より、「No.24：今宿」（35/112 で 31.3%）、「No.4：辻」（37/120 で 30.8%）、「No.8：手原」（35/71 で 49.3%）である。

注 20) 文献 11) において、筆者らは、明治初期における平地集落の典型的な姿を明らかにしており、規模は 30～40 町歩で、約 600m 四方、屋敷を中心とする居住域が 2 町歩弱四方、戸数 40 戸前後である。

注 21) 文献 6) の式内栗太八社と栗東の古社より抽出。さらに水利開発との関係から今井用水と関わりが深い辻の天満宮と出庭の出庭神社を加え 10 社。このうち、野洲川水系からはずれる集落・下戸山（治田村・金勝川沿い）には、式内社として、五百井神社と小槻大社の 2 社あるが、後の水利状況の分析は野洲川水系に限られるため、除いている。

注 22) 『延喜式』（927 年完成）神名帳に記されている神社。文献 8) に、「高野神社は高野郷の総社で、高野造と関係が深い。」とある。

注 23) 六国史（『日本書紀』『続日本記』『日本後記』『続日本後記』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』）に記載があるが、『延喜式』に記載のない神社。文献 8) に、「勝部神社は物部郷の総社で、物部神社と称した。本殿（国重文）は応永 6 年（1399）創建。開拓技術集団勝部（すぐりべ）によるかと思われる。」とある。また文献 13) に、勝部村の沿革について、「…用明帝ノ時（6 世紀末）、物部守屋・中臣勝海ノ二氏各地適歴ノ際此地ニ来リ川流ヲ通シ漸ク荒原藪沢ヲ開墾セシヨリ人民居ヲ此地ニ移シ専ラ農耕ニ従事シ物部郷勝海村ト称セリ…（中略）…更ニ勝部村ト改ムト云降テ佐々木氏ノ時ニ至リ勝部左近ナルモノ堡塞ヲ築テ此地ニ居レリ…」とある。

注 24) 文献 6) に、「蜂屋一体は古くは玉岡郷といい、舒明天皇の 4 年（632）、物部氏の田荘（たどころ）とされた。また、宇和宮神社社伝によると、養老年（717）9 月、領主物部玉岡宿禰（すくね）国照・国経父子が神託を受けて勧請した。」とある。

注 25) 文献 9) に、「大宝元年（701）に祭神が降臨したと伝え、古くは大宝天王宮、今宮応天大神宮などとも呼ばれた。中世・近世を通じ疫病を鎮める牛頭天王として広く信仰を集め、周辺 50 余村の総社であった。」とある。

注 26) 文献 6) に、「文明 3 年（1471）に焼失後、永正元年（1504）に山麓、に移された。」とある。

注 27) 文献 6) より。

注 28) 文献 15) に、「寛治六年（1092）出羽介橘宣幸ナルモノ此地ヲ領シ、田地ヲ開拓セシキ、野洲川ヲ引キ、養水ト為シタル以テ始トス、其後興福

寺領トナリ、官務ノ命ニ依リ、永正三年（1506）三月久保石見守義慶、出庭上総助國頼奉行トシテ、井堰ヲ改造セリ…」とある。辻の氏神天満宮の社記には、その井水の守護神として勧請した時に始まると伝えられている。出庭の出庭神社も創祀を同じくする。

注 29) 図中、※井組外は、共同で用水を管理する井組には加入していないが、一部、引水の権利を有していることを。※川尻は井組には属さないが、その用水の流末に位置し、水を受けることができることを。※悪水は上流集落の灌漑排水を受けることを示している。

注 30) 文献 7) より。

注 31) 明治 5 年に物資運搬のため下流から蜂屋まで川脈が整備された（文献 6)）こととも関係していると考えられる。

注 32) 文献 6) より、各集落では不足する用水を補うため、早魃の折には、集落の溜池（地下水が湧き出たもの）を利用することもあった。また、文献 14) より、大正期になると動力による揚水機が数多く設置されている。動力の導入以前、明治期までの前工業化社会においては、水を汲み上げることとは大変な労力を要することから、集落内の農地全てに常時、水を行き渡らせることが難しかったことが理解できる。

注 33) 20～50 町歩の集落は本文で述べたとおり 14 ある。前後±5 の範囲、15～55 町歩では 18 ある。このうち、資料の制約がある 33.上鉤、39.中沢、35.坊袋（以上、治田村で水利関係資料がない）、19.千代（地籍図等の資料がない）を、さらに上流部や河川の自然堤防上に立地し、集落の形状が整形になっていない 2.林と 20.浮気、28.大門、29.横江を、また 2 つ以上の居住域があり、それぞれの居住域のまとまりが小規模である 13.荻原、26.二町を除く 8 集落を選定した。18.十里は 2 つ以上の居住域がある集落であるが、居住域のまとまりが一定程度ある東地区を対象とした。

注 34) 小字清水および里内の東端部分の藪の地割が細分化しており、複数の所有になっていることが、別途、土地台帳資料により確認できる。

注 35) 9.大橋については、『大橋区誌』の 1737 年（天文 2 年）地図より。その他については、表 1 に掲載の水路図等資料より。

注 36) 文献 16)、17) より、一般的に扇状地の開発は、まず扇裾、扇側の開発が先行し、開発の技術的・社会的条件が整ってから扇央、扇頂の開発が行われた。つまり扇裾部分では、扇状地に浸透した地下水があらわれて湧水線を形成し、自然灌漑が容易で、かつ洪水からも安全なため、最も古い集落が立地し、そこが開発の出発点になる。さらに、扇頂部は、交通路が収れんする地点であるから開発の第二の拠点となる。これらに対して、扇央部の開発は浸透性土壌のため、もっとも遅れたものとなっている。しかし、土地はやせてはいないから、灌漑さえ発達すれば、豊かな農耕地となる可能性を有している。

参考文献

- 1) 古島敏雄：土地に刻まれた歴史，岩波新書，1967
- 2) 金田章裕：条里と集落の歴史地理学研究，大明堂，1985
- 3) 足利健亮：景観から歴史を読む，NHK 出版，1998
- 4) 竹内理三編：大系日本史叢書 6 土地制度史 I，山川出版社，1973
- 5) 草津市史編さん委員会：草津市史 第一巻，1981
- 6) 栗東町史編さん委員会：栗東の歴史 第一巻 古代・中世編，1988
- 7) 守山市：守山市誌 地理編，2001
- 8) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会：角川日本地名大辞典 25 滋賀県，1979
- 9) 栗東歴史民俗博物館：テーマ展「継の歴史と文化」冊子，2001.5.26～6.24
- 10) 山森芳郎：近江湖東平野における条里空間について 農村空間の史的形成過程に関する研究（1），日本建築学会計画系論文集，No.429，pp129-139，1991.11
- 11) 秦憲志、玉置伸佑：明治前期における滋賀県の農村集落の姿（2）—集落の空間要素とその典型規模、日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）E-2 分冊，pp.423～424、1999.9
- 12) 栗東市文化体育振興事業団：栗東の街道を歩く，2002
- 13) 滋賀県市町村沿革史編さん委員会：滋賀県市町村沿革史 第 5 巻（『滋賀県物産誌』復刻版），1962
- 14) 滋賀県内務部：滋賀県栗太郎野洲郡甲賀郡農業水利及び土地調査書，1923
- 15) 中川泉三編さん：近江栗太郎志 第 4 巻，1926
- 16) 谷岡武雄：平野の地理，古今書院，1963
- 17) 谷岡武雄：平野の開発，古今書院，1963

（2010 年 1 月 10 日原稿受理，2010 年 10 月 7 日採用決定）